



巣づくりの中の雄

首だけいれて孔内をうがつ

巣づくり交代

□ 巣づくり

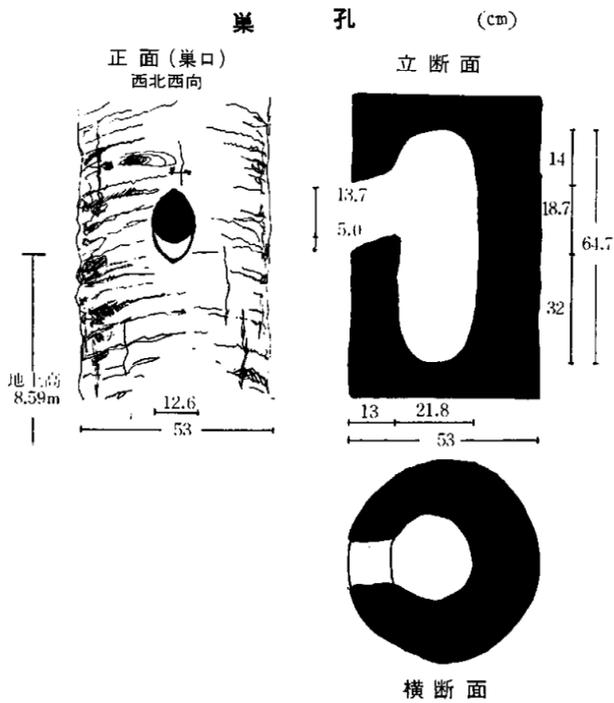
野幌森林公園の

クマゲラー一家

— 観察と保護の記録 —

クマゲラー観察グループ

〔写真〕 村野 紀雄  
〔〃〕 黒沢 隆雄



給餌

まとめ

3月	4月	5月	6月
つがい形成	造巣活動	抱卵	育雛
なわぼり確立	約40日	13~15日	29~31日
3.9 雌を確認	3.23 交尾確認	3.28 (まだ穴にはなっていない) 営巣個所確認 (後5.4まで16回確認)	5.5 7 産卵
		5.18 20 孵化	6.16 18 巣立確認

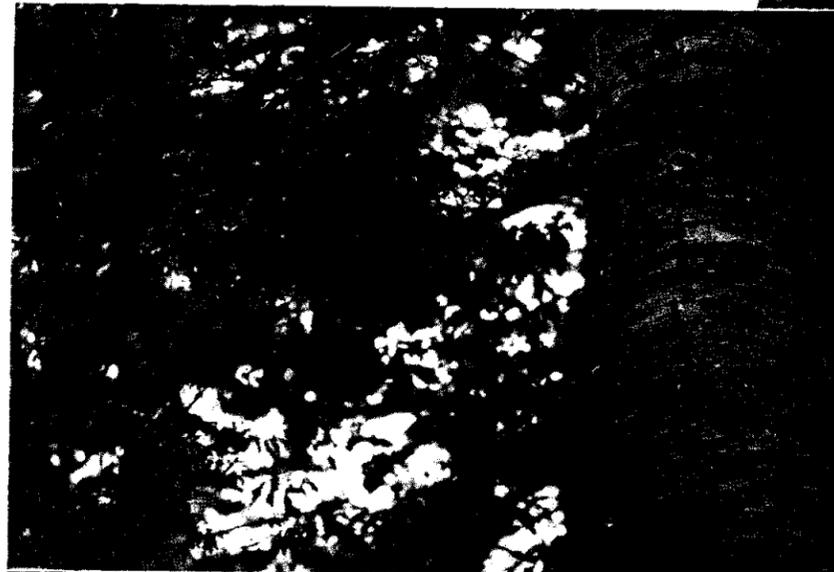
# □ 巣 立 ち

あたりをうかがう



上——巣立ちの瞬間

下——トドマツ枯木の根元まで飛んだ雛は、この上までよじのぼって、また飛翔をくりかえす



上——巣立ち前、親から餌をもらおう

下——親を呼ぶ



巣立ちを促す父親。このあと、穴の右横へ身体をよせる



## V はじめにA

札幌市郊外の野幌森林公園に、クマゲラの営巣木が発見されたのは、まだ雪深い三月もはじめのころ(一九七五年)だった。この鳥の巣づくりが身近に見られるという減少しないチャンスを楽しんで、発見した者たちは、その後、てんでにこの木の下に通っては、静かに営巣を見守るようになった。六月になって無事に三羽の子クマゲラが巣立ったが、それまではいろいろな事件や心配がこの木のまわりで引き起こされた。

この記録は巣を見守ってきた人たちが、巣立後に集まって、各々ばらばらながらその観察を述べあい、特に柳沢、藤林の資料を中心にまとめてみたものである。

## V 雌鳥の飛来A

ここ二、三年来、野幌森林公園には冬期間クマゲラの姿が確認されている。いずれも雄で、結局、棲みついているのは雄二羽であろうといわれ、繁殖を見ることはなかった。それが、今年になって、どこからか待望の雌がやってきた。三月九日の早朝にスキーで入った観察者の一人が、まずこの雌に会っている。そのとき、雌は立枯木の樹皮をはがし、くちばしを深くつつこんで

餌をあさっている。四月三日には、この雌の前で二羽の雄が戦かっている。

## V 交尾(最終五月四日)A

三月二十三日朝八時ごろ、同じところでは交尾を目撃している。そのとき、雄は普段とは異なる声で、クックワァー、クックワァーとかん高く鳴き、姿勢を水平にした。雌もやはり姿勢を水平にしゃがみこむよう

にし、頭をやや下にさげ、翼をこまかくふるわせて背上当とまろうとする雄を持っていた。交尾はその後、営巣されたトドマツの近くで何度も行われ、藤林の記録だけでも五月四日までに延十六回に及んでいる。交尾はほとんど朝六時から七時半までの間に行なわれ、オヒョウ、オオバボダイジュなどの大きな広葉樹の水平に伸びた枝の上で見られた。朝のうち、二度の交尾を行う

(藤林)

こともあった。

## V 巣づくりA

巣穴 三月の下旬にただ黒づんでいたトドマツのそのあたりが、四月に入ってからつきり穴となった。四月六日には、しきりとその穴を掘っている雌の姿を確認している。そのトドマツは比較的大木の多いそのあたりでも屈指の大木で、高さ三〇m、胸高直径六四cm、樹令一五〇年ぐらいの壮大なもので、地上から一二mほどのところまで枝の枯れあがった美しい姿をしている。巣穴は地上から高さ八・五九mのところ、西北西に面してあげられていた。できあがった穴は後になって調べてみると、入口が縦一八・七cm、横一一・六cmの下部のやや広がった楕円形をしており、中の穴は縦六四・七cm、径二一cmの長楕円形をして

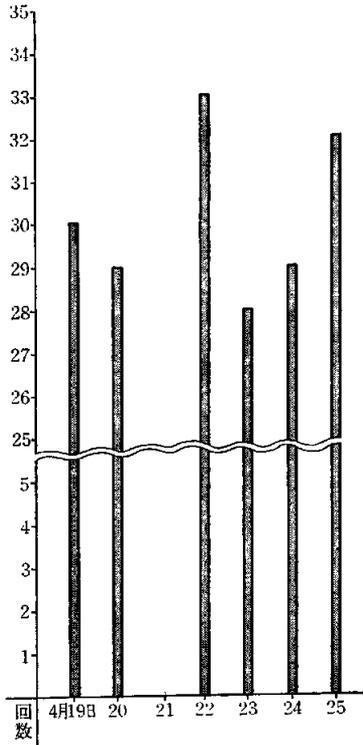
いた。

さて、このトドマツのある位置から数mのところには道があり、その向うにゆるやかな傾斜をもった針広混交林があつて、巣穴の位置からは視野が広く開けている。しかし雪が融けて道があらわれてみたら、通行者が多く、木の下にはテーブルや椅子が据えつけられており、またすぐ近くある園地からは終日子供たちのかん声がひびくなど神経質なクマゲラにとってはひどい営巣場

表1 交尾回数

月日	曜日	回数	時分	備	考
3. 9	日			午前8時12分、初めて雌を確認する	
15	土				
16	日			大沢園地から桂コースにかけて、とび鳴きをきく	
21	金				
23	日	1	7:10	午前6時50分頃、初めて交尾を観察する	
30	日			午前8時5分、上空をゆっくり一対のアオサギ、 1分年初めて確認	
4. 3	木			クマゲラ雄2羽、雌1羽を同時に確認	
5	土	1	6:50		
10	木				
13	日	1	6:40		
14	月	1	7:05		
19	土	2	6:15		
22	火	1	7:20		
27	日		6:45		
29	火	1	6:35		
30	水	2	6:13		
5. 1	木	1	6:55		
2	金	2	7:30		
		2	7:38		
3	土	2	7:25		
4	日	2	7:00		
		1	5:58		
計		16			

図2 巣づくり最盛時の木片排出回数  
(1時間あたり)  
(観察4月19日～4月25日)



所となった。

巣づくりは、まだそんなふうになるさくならないうちに、雌雄交代でせつせとつづけられた。四月十三日午前六時一〇分ごろ巣穴に入って壁を穿ちはじめたのは雄だった。二〇～三〇分間隔でヒョイと巣口に顔を出して、くちばしをまるで深呼吸でもするように大きく開き、あたりをキョトキョト見渡しては、また中に潜りこんでいく。一時間半ぐらいそんなことをくり返して雌は穴を離れ、二〇mぐらい離れたオオバボダイジュの幹に止まり、羽づくろいをしてからどこかへ飛んでいってしまった。この日は雌雄とも巣づくりのノック行動(交代の会図)がなく、ほとんど別々に飛んでくは穴に潜りこみ、巣孔を穿っては飛んでいくという行動が、何回かくり返されてい

る。巣づくりは四月十九日～二十五日(穴の確認後一四日～二一日目)ごろがもっとも忙しくなり、巣穴内の打音回数が多くなる。木屑の排出回数を数えてみると、一時間に三三回にもなることがあった。  
産卵 四月二十五日を境に、穿孔打音は潮のひくように減り、木屑の排出回数も激減している。そして五月三日になると、打音の調子がそれまでとは変ってきた。雌雄は交代で巣穴に潜りこむが、いずれも鈍いトントンという音を一〇分間ほどつづけては沈黙するという状態となり、七日にはその音も全然聞えなくなった。このころ、つまり五月五日～七日の間に卵が産まれたと思われる。  
空巣狙い 巣づくり中にこの巣穴や親鳥に石を投げつけたたり、カメラを極端に近づ

けたりする心ない人たちがいたが。そのほかに空巣を狙うものもいた。それは主にゴジュウカラやムクドリなどの小鳥で、彼らはずくりかけのクマガラの巣にちゃっかり自分の巣材を運びこもうとする。

四月十三日のこと、くだんのゴジュウカラが、ナナカマドの枝を伝わって巣穴のところまできて羽ばたいては引きかえすという行動を数回くり返したあと、近くのオオバボダイジュに飛んで、その樹皮や附着物をくちばしいっぱいにくわえ、そこから一直線に穴に運びこんだ。そこへ帰ってきた雄のクマガラは、まず穴の入口にピタリと止まり、頭を後方にひっくりかえりそうなくらいに反らしてから、フィツと穴に潜りこんだ。そしてすぐに顔を出して、ゴジュウカラが運びこんだばかりの樹皮をくちばしにはさんで、外にはじきとばした。ほかにはキバシリ、ムクドリ、アカハラの空巣狙いが観察されている。

孵化 五月二十二日に藤林が集音装置で雛の声を聞いているが、産卵日から推定して、二週間目の五月二十日前後には雛が孵えったと思われる。

### V 育 雛 A

雛たち 雛たちが巣穴から顔をのぞかせるようになったのは孵化後二週間ほどたっ

た六月三日ごろで、それまでは巣の中でか細い声で鳴いていたのが、ジャーン、ジャーンとやたらに騒々しい鳴き方に変ってきた。巣穴から顔を出した雛のくちばしの先は親のように黒づんでおらず、白っぽいきれいなアイボリーで頭部がうっすらと赤い。あとになって雄二雌一と確認される。

採餌 孵化後一〇日もすると給餌の回数はめだつて多くなり、それまで遠くまで行ってなかなか帰ってこなかった親は、営巣木の近くで餌を捜すようになった。またどういうわけか、雄の方が雌の場合よりも近くの木で採餌することが多かった。

六月一日のこと、雄が巣穴から一五mほどの立枯木(トドマツ)に止まり、くちばしに全身の力をこめてコーン、コーンと、うがちはじめた。その様子は、まるでビル解体の時に用いられる鉄の振り玉を思わせる激しさで、三〇分近くもつづけられた。作業は単に樹体にくちばしを撃ちつけるばかりではなく、時折り、くちばしや脚の先を使って樹皮をひっぱがすなど、至極多彩で、そのため立枯木はかなり早いスピードで樹皮を失い裸になってしまった。

孵化後二週間ほどになると、雛たちは親が近づくと一斉に鳴き叫びながら、くちばしを開き、ひととおり餌の分配を受ける。給餌がすむと、親はその場で、大きな声で



静けさが戻ると、再びジャーッジャーッ、クワツカ、カクワツカカあるいはキョーキョッキョッキョッと鳴きはじめた。

このほかに、親たちの攻撃に会うものにカケスやカラスがあり、菅巢木のまわり半径三〇〜五〇m内を侵すものは必ずといっていいほど追われている。巣の前の道を馬や犬が通ることもあるが、このような大きな動物に対しての攻撃は見られなかった。

しかし攻撃しないまでも警戒鳴き（ケオーツ、ケオーツ）は執ようなくらい行われ、犬が近づいたとき（六月一日）などは特に激しく、侵犯者が去った後でも一〇分近く鳴きつづけている。

それは人間に対してでも同じだったが、前を通る人の多すぎるせいか後になるといちいち警戒音を発することがなくなった。ゴジュウガラのような小さな鳥に対してはまったく無関心で、たとえ巣口までやってきても、追い払うようなことはなかった。

別居 明方、いつもはじめに巣穴から顔を出すのは、きままって父親だった。夜間の巣守りは父親の役目で、母親は明るくなってから家族のもとにもどるといって別居夫婦でもあった。

六月十一日の明方三時半ごろにいつものように父親が顔をのぞかせたが、翌朝、暗いうちから待っていた観察者の前に最初に

あらわしたのは巣口からではなく外から飛んできた姿だった。十一日の夜から父親も別居しはじめたのにながらなかつた。

時刻にして三時五〇分ごろ、飛んできた父親は巣口でクイン、クインと鳴いて、雛を呼び寄せ、確認するかのようにして餌を与えている。このころになると雛の身体は親と同じぐらいの大きさになった。

### ▼巣立ち▲

六月十六〜十八日の三日間にわたって、巣立ちが行われた。十五日には菅巢木の附近の樹から親がしきりに呼び鳴きしているのを観察している。その後一日おいて六月十七日に一羽、六月十八日最後の一羽の巣立ちが数人の人に確認されているので、六月十六日には誰も見ていない間に、最初の一羽が巣立ったものと思われる。

六月十七日午前十一時二〇分、親が近くから呼び、雛が巣口で首を伸ばす。スーッと飛んできた親が雛のくちばしの中をチョンチョンとつづくと、巣口の側方に身体を移す。その瞬間に首を伸ばした雛が空中に踏み出し、そのまま道を隔てたオヒョウの幹まで飛んだ。もう一羽も親の招きに応じて巣立ちの身構えを何度もするが、空中への一歩が踏み出ないといううちに、日が暮れてしまう。夜には雨が降り、翌六月十八

日も朝から小雨が降る。親の餌を運ぶ回数 はめっきり減り、雛のいらだちが目立つようになる。そして午後一時十五分、形どおりに親が巣口にとまって、穴の側方に身を移すとその脇をやつと飛びだした。

しかしそれは、なんとも飛ぶという状態ではなく、一五mほど離れたトドマツの根元に、バタバタとたどりつくというようなものだった。親がすぐそのトドマツに飛び、両側から雛を上げますように根元から上のほうまでよじ登らせる。やつと木の先端までよじ登った雛は、またバタバタと飛んで近くの木の根元にとりつく。親がまたその両脇から、つき添ってよじ登らせる。ヨイショ、ヨイショと観察者から声がある。他の雛にくらべて尾羽が短く、身体のパランスをとるのも下手で、やはり見た目にも弱々しい雛だ。こんな雛を迎えて、そのあたりはしばらくの間、クマゲラ一家の鳴き交わす声がひびいた。

### ▼保護のための規制▲

この巣が利用の多い遊歩道のすぐそばにあり、いたずらや撮影などの刺激が心配されたので、抱卵期の終りごろから野幌森林公園事務所では巡視員の重点監視個所に指定するとともに、チラシを配布して附近の利用を規制した。

### ▼おわりに▲

ただいま、野幌森林公園には巣立ち終えた三羽の子を持つ一家族と、独身の一羽の計六羽のクマゲラが棲んでいる。

立枯木の散在する静かな広い自然林を必要とするこの鳥は、いわば野幌の自然の深さを象徴するものだが、最近のこの森は人の入込みが激増し、また、度重なる風害のため、むしろ荒れてきている。

荒れる森と増える人の中にあつて、このクマゲラたちがそのまま居ついて数を増やすことができるかどうか解からないところだが、多くの人がこの天然記念物に身近に接することができるようになったら素晴らしいことにはちがいない。しかし、クマゲラにとって、人間たちの行動はまだまだ刺激が多すぎるようだ。来年は人目に触れないところに営巣して欲しいと願いつつ、この雑な記録を閉じる。

この記録に参加した人たち

柳沢信雄、柳沢千代子、藤林忠雄、黒沢隆野口正男、新宮康生、山下章代、野村悟郎宮川貴子、井村喜明、本次義光、小川伊佐雄、村野紀雄

（野幌森林公園事務所）